日本聖公会
ウイリアムス神学館ニュース

2015年
第93号
The Bishop Williams Theological Seminary NEWS
日本聖公会
京都教区
発行・編集人
吉田雅人
〒602-8011
京都市上京区烏丸通
下立売上る桜鶴円町380
☎ 075(431)5406
FAX 075(431)5445
Williams@muc.biglobe.ne.jp
寮☎075(431)5408

共に考えること

菊地伸二

これまでわたしは神学館で教会史と古典語（ギリシア語・ラテン語）を主に担当してきたが、二年ほど前から「哲学入門」という科目が新設され、それも受け持つこととなった。教父や中世の思想に親しんできた者としては嬉しい話ではあったが、その科目について将来聖職者となる人に何を伝えていくべきか、ということになると、必ずしも明確な答えが出ているわけでもなく、今も試行錯誤を重ねながら授業を進めているところである。

教父・中世哲学について、少しだけ触れると、その担い手である聖職者や修道士は総じて「信ずる」ことと「知る」こととの関わりを大変重要なことと見なしていた。アンセルムスの「理解するために信ずる」や「知を求める信」という言葉はその最たるものであろうが、トマス・アクィナスの「信ずるとは承認をしながら考えること」という言葉も、信ずることを、真の認識を目指して思考することとして捉えている点で注目に値する。

神学館に入学する人にとって、本学は神学に関わる専門知識を習得する所である。将来聖職者となって信徒を導いていくためには、神学に関わる正確な知識を身につけておく必要があり、そのための場が神学校であると。もちろんそれは確かなことである。しかし他方で、聖職となる人は、この世的なものにさまざまに巻き込まれながらも、神からの声に聴き従いながら生き続けようとすることによって、信徒の心に大きな影響を与えていく存在でもある。それは、神のことについてつねに考え、しかもそれを信徒と共に分かち合おうとする姿と言い換えてもよいかもしれない。

ある大学の入学式式辞で「考え続ける忍耐力」を持つことの必要性が学生に投げかけられたそうであるが、それは神学校にも当てはまることである。神学校と訳される「セミナリー」はラテン語で「苗床」を意味する「セミナリウム」に由来する。神の言葉という種が蒔かれ、共に学ぶ中で育ち成長していく所、それが神学校である。神の国へと向かってどこまでも成長していく場、共に考えながら信ずることを深め合っていく場、その始まりが神学校でもある。そのような現場に関わる者の一人として、与えられた科目を通して少しでも役に立つことができればと願っている次第である。

（きくち しんじ・本館教員・教会史担当）

聖書から学んで

今秋、本学の沖縄実習で訪れた愛楽園の「青木恵哉頌徳碑」に「…世の偏見とたたかいつつ…病者を組織して信念と智謀とをもってこれを指揮し無抵抗の抵抗を旨とする…戦いのドラマをへて屋我地大堂原をかちとった」とあった。このうち「無抵抗の抵抗」にも惹かれたが、それ以上に「信念と智謀」に目が釘付けになった。そこには音声ガイドも設置されており「音」でそれを聴けば（信念と）「希望」と聞き違えそうである。しかし「智謀」なのである。そこから「…だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」（マタ一〇・一六）とのイエスの言葉を思い出した。また、パウロの言葉をもじれば、忍耐は練達を、練達は智謀を、智謀は希望を生む（ロマ五・四参照）とでも言えようか。

そしてさらに、わたしの恩師の教え、「ために」から「ともに」への転換（『断片の神学』）が思い出された。青木恵哉師は確かに、ハンセン病者の「ために」遣わされ、「ともに」生きた。多分に陰翳を欠く昨今の言語状況にあって、この「智謀」を理解するのは容易ではないであろう。同師の著作『選ばれた島』をいま読んでいるところだが、それを通して、「智謀」にひらめく師の霊性をじっくり味わい、そこから学びたい。

（黒田　裕）

2015年度 体験入学

十月一三日(火)から一五日(木)までの二泊三日で、今年度の体験入学が行われました。五つの教区から五人の方が参加され、神学館の教育理念を聞き、祈りと生活を共にしながら神学生と一緒に学びの時を持ちました。また「牧師であること」というテーマで、本館理事でもある瀬山公一司祭(神戸教区)からお話をうかがいました。以下は、参加者の感想です。

****

体験入学を終えて

大塚　陽子

本来ならば夫が参加させていただくところ、休暇が取れず、私が参加させていただきました。

朝七時からの礼拝・聖餐式に始まり、夕六時からの礼拝に終わる神学館での日課は、素晴らしい大変貴重な体験となりました。

礼拝・講義・清掃・食事などを共にさせていただいた神学生の皆さんは、どの場面でも自然体で、熱心に学んでおられ、心の中にそのお一人お一人の姿が深く刻まれました。各講義については、聖書研究以外どの講義も私にとって初めて学ぶものばかりで、全てが大変新鮮であり興味深いものでした。

あえてどの講義が印象深いものであったかと申しますと、『キリスト教倫理学　安楽死とキリスト教の倫理』です。長年、障がい児学校の教師をし、特に重症心身障がい児・者と言われる多くの生徒さん方と学んできました。また私にも、障がい者の弟がおります。

シュベネマン教授は、一つ一つ問いかけ考えさせながら授業を進められました。その中で、現在生命維持装置を付け病室で日々過ごしている一人の教え子の姿が目に浮かびました。私はキリスト者として、どのようにこのご家族に寄り添っていったら良いかと悩んでいました。が、この授業で、大きな指針を学べたと考えています。

『道を伝え、己を伝えず』と言うウイリアムズ主教の生き方を表した言葉を心して、一信徒としての今後の道を更に歩みたいと思います。二泊三日の充実した学びの時を備えていただけた事を、神様と関係者の皆様に、感謝いたします。

(おおつか　ようこ・函館聖ヨハネ教会)

****

体験入学に参加して

アウグスティヌス　深山　鷹一

十月一三日から一五日にかけて、ウイリアムス神学館の体験入学に参加しました。今回は、体験入学を通して感じた心の動きについてシェアをしてみたいと思います。

僕自身本当は人と接するのが苦手なのです。苦手というか傷つけるのが怖いんですね。おいて行かれないように必死になって失敗し、それで凹む、だんだん、居ること自体が迷惑じゃないかなと思ってくる。まぁ、うつ病の子どもみたいなのを持っているんですね。

ぼく自身、教会にかかわり始めたのも、ある意味このような救いを求めてだったのだと思います。助けてほしい、助けてほしいと。そして、教会の礼拝に行き聖書が読まれる毎に、まるで今自分自身に語り掛けられているような言葉が与えられたのです。

励まされることもありました、諌言もありました。それでも、本当に今必要に応じて与えられたメッセージに聞こえたのです。

ぼくは、そのとき黒い雲の隙間に一筋の光を感じました。そして、ひとつやりたいことが与えられました。ぼく自身が苦しかったときみ言葉を欲していたように、私もいまほんとうに苦しい思いを持っていることによって、み言葉を伝えたいと思ったのです。

それは目の前の人の為、だけではなく過去の自分自身を救いたいのです。もちろん僕自身不完全だし、まだまだつらい気持ちを持つことがあります。神様と、そしてともに祈ってくださる仲間がいなければ成し遂げられないと思います。そのような気持ちを持ちつつ、少しでも隣人を助けたいと思い、現在仙台にあるエマオという東日本大震災被災者支援の団体で支援活動をさせていただいております。そこで、慣れないながらも仮設住宅や農家の方のお手伝いをさせていただいております。そして、将来自分が救われたときと同じようにみ言葉によって、目の前の人を救いたいと思い、今回の体験入学に参加させていただきました。

（みやま よういち・横浜聖アンデレ教会）

迷いの中で体験する

ルカ　宮田　裕三

当初、特別講義に興味を持ち、リフレッシュ参加のつもりで申し込みについて問い合わせたところ、神様の突然のいたずら心により、今後自らが学んで行くための体験入学になってしまった。

在学生の授業に参加、朝昼晩の礼拝、そして朝昼晩の食卓を囲む時を過ごさせていただいた。個性豊かな神学生と共に場所と時間を共有させていただき、聖職に召されるための前準備の段階をほんの僅かではあるが垣間見させていただいた。

▲ 体験入学に参加された皆さん

聖書研究やキリスト教倫理他の授業に参加し、学ぶことの楽しさを感じるなかで、ただ学ぶだけでは無く、それを限られた時間の中で自分のものとして言語化する困難さを感じ、言語化された教養を他の神学生と共有してディスカッションをすることによって体験する、自らの未熟さから来る羞恥心の再認識作業。その羞恥心の無意味さ、神様の前での無力感を経験し、これらの事を通して、神様の御心を探し求める大切な時間を過ごすことが出来る学び舎ではないかと気がつかされた。

「神様の召命によって集められたとはいっても、ここに来ることを決断したのは自分であることを忘れてはダメです」という神学生の言葉が心に残った体験入学だった。父と子と聖霊の御名によって、アーメン。

（みやた ゆうぞう・神戸聖ヨハネ教会）

体験入学に参加して

島　優子

「信仰生活を送る中で、そして教会・教区において奉仕をする上でも、一度きちんと神学を勉強してみませんか？十月に体験入学がありますよ。」と勧めて下さる声に押されて、緊張の中体験の日々を過ごしてきました。

日常の慌ただしさを忘れ、祈りと学びに集中できるこの時間をとても贅沢で幸せに感じました。授業も共同生活も全てのことが初めてで新鮮で、これが三年間続くなんて恵まれすぎ!?と一瞬考えますが、実際は厳しさと辛さの方が勝るようで、交流の時間には神学生の皆様の苦労話もたくさんお聞きしました。しかし志を同じくする仲間の励ましと、何より祈りの力に支えられている神学生は皆が輝いていました。共に参加した四名の体験入学生のそれぞれの思いと決断にも大きな刺激を受けました。

神様が私をどのような形で用いようとなさっておられるのか、今後自分の生き方についてまだ明確な答えは見出せませんが、晴天の京都御苑で黙想した時に吹いた爽やかな風に、「導かれるまま風に乗りなさい」という声を聞いたような思いがして心が軽くなり三日間を終えました。温かく迎えて下さった関係者の方々に感謝いたします。

（しま ゆうこ・熊本聖三一教会）

2015年度 沖縄実習報

十一月四日(水)から九日(月)までの五泊六日、神学館は沖縄教区とナザレ修女会のご支援のもと、二〇〇三年以来十二年ぶりに「沖縄実習」を行いました。

ことに今年は戦後七〇年の年です。また安全保障法制を巡って、私たちの国が大きく揺れ動くと共に、残念だけれど大切なところで道を間違えたようで、怪しい一歩を踏み出し始めている、そんな危惧を深く感じさせる時でもありました。

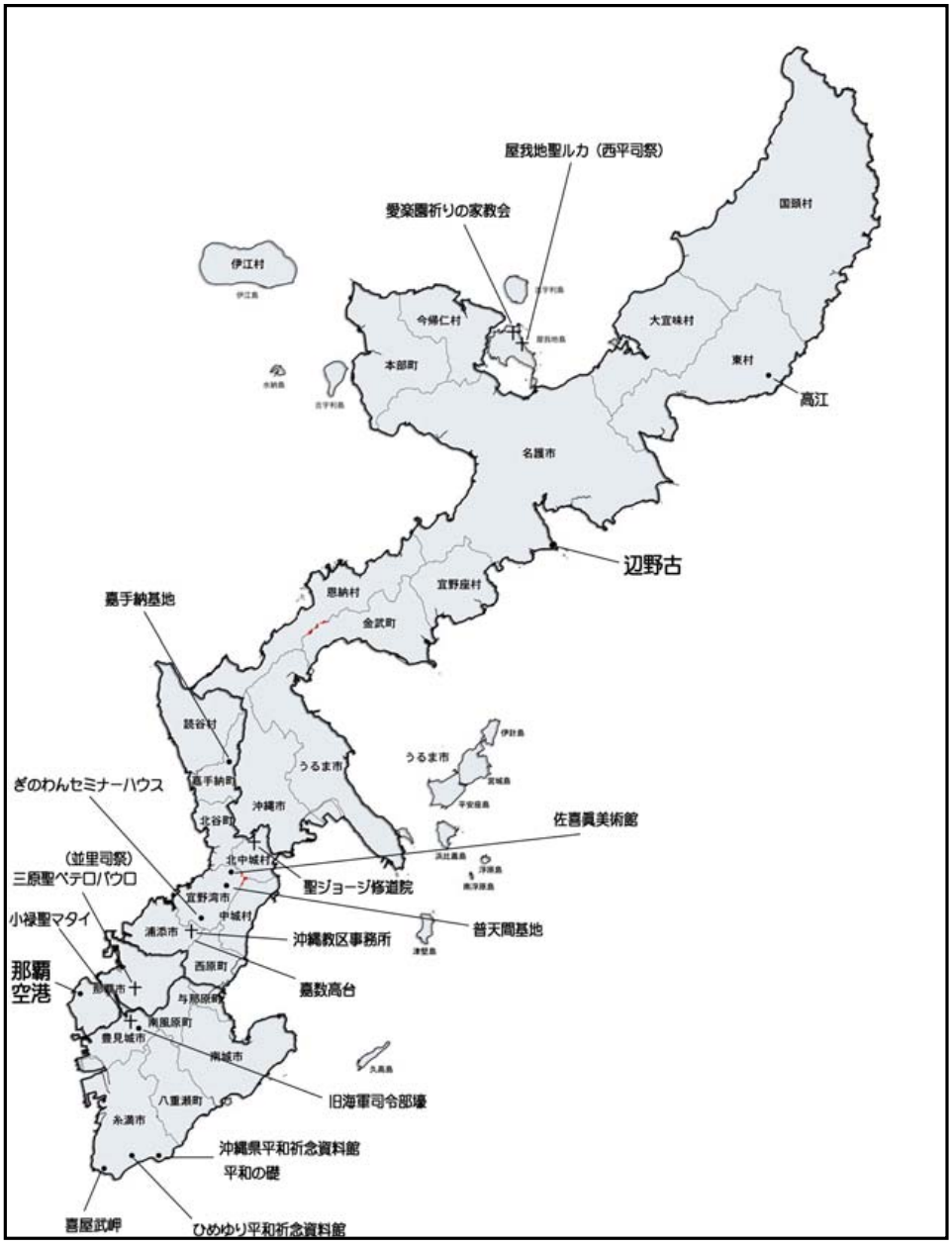
そのような中で、九月から少しずつ、沖縄実習に向けた事前準備を始めていきますが、その矢先、九月二十日未明、安全保障法制は参議院でも可決されてしまいました。私たちはそのような状況の中で、「沖縄キリスト教史」「平和・基地問題」「愛楽園」について、三グループに分かれて調べ、発表して分かち合いました。

そして十一月四日、私たちは大阪国際空港から那覇に飛び、ナザレ修女会聖ジョージ修道院を拠点にして五日間を過ごしました。

最初に平良　修牧師から現在の沖縄にかかわる諸問題について、また上原主教様からはベッテルハイムと愛楽園の歴史について講義していただきました。三日目は宜野湾セミナーハウスの又吉さんのご案内で南部戦跡を中心に巡りました。四日目は高良孝太郎司祭のお世話で、辺野古のキャンプ・シュワブ・ゲート前の運動に少しだけ参加?見学?し、嘉手納基地なども訪れました。五日目の主日礼拝は、愛楽園祈りの家教会の聖餐式に出席し、礼拝後は西平司祭や信徒の方と病床訪問と聖餐にご一緒させていただきました。

短い期間でしたが、多くの課題を肌で感じることができ、感謝でした。沖縄教区の皆様方に御礼申し上げます。

以下は神学生の簡単なレポートです。詳細はヴィア・メディアでも報告する予定です。



「沖縄の基地問題を見つめて思ったこと」

三年　テモテ　遠藤　洋介

今回、初めて沖縄を訪れました。今まで持っていた沖縄県のイメージは、きれいな海と美味しい食事、ゆったりとした時間など良いイメージでした。しかし今回、戦跡巡りや基地の見学、また講話などを通してそれまでの沖縄に対する良いイメージだけの先入観が大きく変わりました。特に基地問題の事実を目の当たりにしたことは私にとって非常にショックでした。オスプレイが低空飛行しているのを見、基地と道路を隔てるバリケードを見、戦闘機の金属音を聞き、辺野古の基地建設の現状と問題を聞き、私が今までどれほど沖縄に対して無知であり、同時に無関心であったかを痛感しました。このままではいけない、同じ日本人として、そして沖縄を訪れた者として、沖縄県の人とともに声を上げなくてはいけないと強く思わされました。

私が本土に帰ってできることは沖縄でデモや座り込みをしている方に比べてごくわずかで小さなことだけなのかもしれません。ですが、これからも私自身、沖縄の抱える問題と向かい合って関わっていこうと思います。私にとって今回の沖縄実習はとても良い経験になりました。神様の平和が沖縄県で一日も早くありますように祈っています。

（えんどう　ようすけ・神戸教区）

▲ゲート前の国道を挟んで立つのぼり

十年以上経っても

二年　ルカ　柳原　健之

今回海外研修の代わりに、戦後七〇年ということで行われた沖縄実習は、私にとっては五度目の学びの機会となった。

初めて沖縄での学びを行ってから約十年が経つが、基地問題は一向に存在し続けており、返還されない普天間基地、辺野古では新基地建設が行われようとし、それを阻止しようと戦い続ける方々がおられます。辺野古には戦いが始まってから何日が経ったのかを示している掲示板があるのですが、その日数は止まることなく、今も一日一日、日が増えています。

▲辺野古の浜に立つ見張りテント

沖縄の現実を知ってから、私に何ができたのかと自問するとほとんど何もできていない現実があり、そのことを改めて確認させられました。基地が必要か必要でないかは個人の考え方で変わると思いますが、キリスト者として考えた時に、神が創られた世界を破壊し、イエスが教えられた「隣人を愛せよ」という教えに背いて、人を殺しに行く基地を造ることが必要であるとは考えられないと思います。私にできることはこのように伝えるくらいしかないかもしれませんが、これからもこの問題に目を向け、伝えていけることは伝えていきたいと思います。

（やなぎはら　たけゆき・京都教区）

沖縄のコルヴィッツ

二年　セシリア　塚本　祐子

▽沖縄陸軍病院南風原（はえばる）号群20号の入口

『沖縄戦の図』は原爆の図と同様、地獄絵図のような生々しい炎と為すすべもない人間の肉体の重なり合いが曝されている。有史以来ヒトの肉体を保護してきたであろう、衣類というものは剥奪され、髪は頭部の毛でしかなく、私達が現在〈在る〉と感じ信じているものは全て崩壊している。集団自決を「手を下さない虐殺」と丸木夫妻は言葉を残しているが、この図は私達が虐殺の行為者であり得る事、また虐殺され得る事を伝えている。

ところでこの大作の脇の小さめの展示室はケーテ・コルヴィッツだった。昔、浦添美術館で幾つも見た憶えがあるが、平和というテーマは共通しているにしても何故遠いドイツの作家が沖縄の地に集められているのか不思議だった。

今回初めて歩いた沖縄陸軍病院南風原壕群20号は、これへの理解を助けたかもしれない。暗闇であるだけではなく真空に近かったであろう壕の中でそれまで自分だったものをそれぞれ捨てただろう。急にコルヴィッツの木版画の太い輪郭の周りが余白ではなく暗闇に思われた。他者の、既に悪意ですらなく、機械的また産業として存在を抹殺されようとするとき丸木夫妻とコルヴィッツが隣り合う事に何の不思議もないのだった。

（つかもと　ゆうこ・九州教区）

辺野古での一枚

二年　アンデレ　松山　健作

沖縄研修を通して、沖縄の歴史を学び、教会における課題について聞き、多くの方々と交わることができた恵みに感謝いたします。

私は写真を撮ることが好きで、今回は五百枚ほどの写真を撮りました。計算してみると一日に百枚ほど撮ったことになります。それらを整理していますと、一つひとつが良き思い出で、学びであったと振り返ることができます。そのなかでも印象的なのは、映っている方々の笑顔です。いろんな方の笑顔をみると何かホッとさせられます。

五百枚もの写真を整理しながら、ひとつ印象的な写真を紹介します。それは辺野古の米軍基地前で基地建設反対運動を行っている人びとに混じっている時の写真です。米軍基地前では、強行的に基地建設が進めることを阻止すべく、座り込みによって非暴力の闘いが続けられています。「もう基地はいらない、私たちは武力による争いを志向しない」という強い意思がヒシヒシと伝わって来る緊張感ある現場です。

その現場で私たちを案内して下さった高良孝太郎司祭は、柔和な笑顔を浮かべて基地建設に反対、武力を志向しない世界を求めておられます。私が先生の笑顔から受け取ったのは「非暴力によって、一緒に平和な世界を作ろうよ」という逆境からの希望です。私は沖縄の地から、争いを志向しない神の平和が実現することへの希望を抱き、祈り続けたいと思います。

（まつやま　けんさく・京都教区）

沖縄実習を終えて

アンデレ　江渡　由直

沖縄へは観光、先輩の司祭按手式で三度も行っていましたが、今回は事前に学生間で学びの時も持ち、実習準備をしての参加でした。

到着翌日には平良牧師から、『沖縄を鏡に映して、あなたたちの宣教の地である日本を見る』を主題に、「沖縄は安全なところですか」との問いかけで始まり、沖縄の声を代弁した、厳しい心への問いかけをいただきました。そして、翌日からは知ったことを現場で見る戦跡巡り、基地と現代の問題をそこで生きる視点で高良司祭にご案内いただき、見て・聞いて・体で学ぶ時をいただきました。そして、最終日は上原主教からも講話をいただいた愛楽園祈りの家の教会での聖餐式でした。礼拝後に病床訪問を高司祭と奥様に同行させていただきましたが、お一人お一人の聖餐に授かる時のお祈りのお姿や献金への思いは、『主に任せ、主に頼る姿勢』の実践を学ばせていただきました。何よりの学び、導きの時でした。

▲祈りの家教会礼拝堂

オキナワの現場に暮らす方々による生の声やお姿は、今までの『知っているつもりの沖縄』の視点を一八〇度変えさせられたこと、また、今回の旅で出会いをいただいた皆様、神学館の先輩司祭、修道院の良子さんにも深く感謝いたします。

（えと　よしなお・京都教区）

神学館の沖縄研修

一年　ヒューム・ユーワン

私は約二〇年間日本に住んでいますが、沖縄へ行くのは初めての事でした。沖縄の第一印象は暑いという印象で、次に日本なのに雰囲気が全然違うので「沖縄は本当に日本の一部なんだろうか？」という印象を受けました。その他の印象としたは、沖縄での様々な問題の原因の一つは、沖縄が一八七九年以前に独立国であったという事です。神学館の沖縄研修の期間は短かったですが、その期間中に沖縄の歴史と沖縄のキリスト教史についてのセミナーが開催されました。セミナーのテーマの一つはベッテルハイムの医療宣教で、それはとても面白かったです。現在、沖縄ではベッテルハイムはよく知られていますが、当時の沖縄では日本と同じようにキリスト教が禁じられていました。ニュース番組でよく放送している米軍基地にも幾つか見学に行きました。見学した基地は本当に大きかったですが騒々しい感じではありませんでした。愛楽園にも行きました。愛楽園は日本聖公会の信徒、青木恵哉によって作られたハンセン病養所の施設です。施設の中には聖公会の愛楽園祈りの家教会があります。皆で、この教会の主日聖餐式に参加しました。

沖縄では私達はナザレ修女会沖縄支部聖ジョージ修道院に宿泊しましたが、その修道院はとても素敵な修道院でした。沖縄教区の皆様には温かくもてなして頂き、大変感謝しております。本当にどうもありがとうございました。

（ひゅーむ　ゆーわん・大阪教区）

神学館の二学期

☆8月20日(木)～21日(金)
聖公会関係学校教職員研修会
☆8月31日(月)、入寮日
☆9月1日(火)～3日(木)
特別研修「人間関係論」
(宮嶋眞司祭)
☆9月4日(金)二学期リトリート
(指導：菊地伸二教授)
☆9月6日(日)、他教派礼拝出席
☆9月8日(火)、二学期授業開始
☆9月12日(土)、教会実習開始
☆9月26日(土)、「今さら聞けない
キリスト教講座」第5回
☆10月9日(金)、ウィリアムス神学館
ニュース発送作業
☆10月10日(土)、ヴィア・メディア第10号
完成、16日(金)に関係各所に発送
☆10月13日(火)～15日(木)、
体験入学、5名参加
☆10月19日(月)、若王子山
ウィリアムス主教記念碑清掃・礼拝
☆10月24日(土)、
「今さら聞けない
キリスト教講座」第5回
「ウイリアムス神学館叢書Ⅰ」発行
教会音楽発声演習講座
☆11月4日(水)～9日(月)、沖縄実習
☆11月25日(水)、卒業小論文中間発表
☆12月2日(水)、二学期授業終了
☆12月2日(水)、
ウィリアムス神学館
関係逝去者記念聖餐式
司式：高地　敬主教
説教：大西　修主教
☆12月3日(木)～8日(火)、
試験・レポート提出期間
☆12月6日(日)、二学期教会実習終了
☆12月9日(水)～10日(木)、
二学期末面接・補講
☆12月11日(金)、終業礼拝
☆12月15日(火)、出　寮　日
☆12月18日(金)、神学館ニュース発行
☆12月29日(火)、二学期教授会

✠ 主の平安をお祈りいたします

＊二〇一五年一二月一二日(土)、本館元教授のヨハネ加納重朗司祭（京都教区退職）が逝去されました。師の魂の平安をお祈りいたします。

二〇一六年度ウイリアムス神学館

入　学　試　験

左記のように2016年度ウイリアムス神学館の入学試験（本科生・伝道師養成コース）を行います。お問い合わせは神学館まで。（075-431-5406）
入学願書および添付書類につきましては、神学館か所属教会の牧師にお尋ねください。

＊試験日時　16年2月4日(木)
＊試験科目　聖書内容・英語・国語現代文・面接
＊願書締切　16年1月29日(金)（必着）

「ウイリアムス神学館叢書」刊行!!

今さら聞くのはちょっと恥ずかしい、でも、知りたい。そんなちょっとしたことを聞いてみたい。そのような信徒の方々の小さな声にお応えする礼拝や祈祷書の疑問に応える本が出版されました。

****

ウイリアムス神学館叢書Ⅰ
いまさら聞けない !? キリスト教
礼拝・祈祷書編

著者　司祭　吉田雅人
発行所　聖公会出版　A5版　344頁
定価　2,000円（+税）